

問 次の文章を読み、著者の考えをまとめたうえで、あなたの「しきり」についての考えを自らの経験为例に挙げながら、六〇〇字以内で述べなさい。

日本における、室内での履き物を脱ぐ習慣は、なかなか変化しない。このことは、住まいのしきり装置とも深くかかわっている。日本の住宅の玄関には、いまだに靴を脱ぐたたきがあり、式台（敷台）こそないが、わずかながらでも上がり框<sup>かまち</sup>がついている。そこで靴を脱ぐことが暗示されているのである。仮に、玄関のたたきの素材がそのまま居室につながりまくった段差がない場合、どこで靴を脱ぐのが曖昧になる。

玄関の戸が現在では引き戸ではなく、ほとんどがドアになった。しかし、欧米と同じようなドアでありながら、欧米と異なっているのは、外開きであることだ。ドアを内開きにする、玄関で脱いだ靴がドアを開いたときに引っ掛かってしまうからである。もちろん、ドアが引っ掛からないほどに広い玄関であれば問題はないのだが、それでも外開きになっているのは、靴脱ぎの習慣があるからだ。

わたしたちは、靴（履き物）を脱ぐことで、外部から内部に入ったと無意識に感じている。もちろん、現在では公共的な建物や商業的な建物では、室内でもほとんどが靴を脱がないようになっていて、靴を脱がない室内空間は、いわばパブリックな場であるとわたしたちは認識している。住まいから一歩外に出ると、パブリックな空間である。それは道路からオフィスや商業施設などへとつながっている。そうしたパブリックな空間から帰ってくると、再び、靴を脱ぐ。住まいでは、ほとんどが靴を脱ぐ。したがって、ある住まいから他の住まいへ行くときも、途中のパブリックな空間は靴を履いて歩いていく。靴はまるで、パブリックな空間を渡っていく船である。

わたしたちは、屋外にいても履き物を脱ぐことがある。たとえば、花見のゴザやそのほかの敷物の上では履き物を脱ぐ。現在では、花見は、段ボールの敷物というのが少なくない。それでも段ボールの上では履き物を脱いでいる。屋外に敷物を敷くことは、日本ばかりではなく、欧米でも行われる。敷物の上で食事をするピクニックのシーンを映画などで目にする。しかし、欧米では敷物の上で靴を脱ぐということはなさそうだ。わたしたち日本人にとっては、段ボールも畳に代わるものとして意識されているのである。敷物一枚であつても、それによつてしきられた場所は、ただの屋外ではなく、座敷のようになる。

履き物を脱ぐことには、外の汚れを部屋（内）に持ち込まないという気持ちが微妙に働いている。外よりは、土間の方が上位であり、清潔であり、土間よりも板の間の方が上位であり清潔である。そして板の間よりも畳の間の方が上位にあり清潔だ。こうした感覚は、たとえば、近代になってからのことだが、板の間ではスリッパのような履き物を使うが畳の間ではそれを脱ぐといった習慣にもそうしたしきり意識を見ることが出来る。また、部屋にも座敷、廊下、台所、風呂、トイレなどに上下のしきり意識がある。現在でも、トイレではスリッパやサンダルを履き替える習慣を残している公共施設がある。トイレのスリッパやサンダルは、おそらく、古くからある下駄<sup>げた</sup>のような高足駄<sup>たな</sup>の習慣からきているのだろう。平安時代の絵巻物『餓鬼草紙』には、高足駄をはいて排泄する場面が描かれている。この履き物は、歩くための履き物ではない。不浄

な場所では特別な履き物を履くという感覚がそこには見られる。

ともあれ、外から内に入った時に、履き物を脱ぐことは、清潔感や汚れ、あるいは不浄感とかかわっている。靴を脱ぎ部屋に入り、スリッパを履き、そして畳の部屋ではスリッパも脱ぐ、さらに時としては、トイレで専用の履き物を履く。こうした感覚は、欧米人にはなかなか理解できないかもしれない。

日本人にとつての履き物に対する意識は、いったいどのようなものなのだろう。履き物に関連するいくつかの言葉を見ておこう。

下駄は、明治以前ではさほど一般的な履き物ではなかったのかもしれない。たとえば、柳田国男は『明治大正史』でかつて下駄は「褻<sup>け</sup>にも晴にも一度でも公認せられたことの無い履物であつたが、其普及は此の如く顕著であつたのは、やはり亦足<sup>また</sup>を汚すまいとする心理の表はれであつた」（『定本柳田国男集』第二四巻、筑摩書房、一九六三年）と述べている。草履<sup>ぞうり</sup>や草鞋<sup>わらじ</sup>が一般的な履き物だったのである。たしかに、下駄は、石ころだらけの道は歩けない。してみれば、下駄は、舗装道路に合った履き物のようにも思える。

「下駄を預ける」とか「下駄をはかせる」といった表現は、さほど古いものではないのかもしれない。とはいいつつも、「下駄を預ける」という表現は、「相手に一任する」といった意味をふくんでおり、わたしたちの履き物に対する古くからの感覚をどこかに残しているように思える。履き物を預けるというのは、室内領域を出て勝手にどこかに行くことはできないという状態だ。だから、「下駄を預ける」という表現には、「相手を油断させる」という意味が隠されている。つまり履き物は、囲い込まれた室内という領域から、自らの主体性によつて出ていくことのできる状態を保証するものといった意味がある。さらにいうなら、履き物は、自らの主体性で、ある境界（しきり）を自在に行き来することのできることを可能にするものだといえるだろう。

下駄よりも一般的な履き物である「草鞋」にかかわる表現としては、「草鞋を脱ぐ」というのがある。博徒<sup>はくた</sup>などが、地域の親分などの家に一時、身をあずける（落ち着ける）といった意味だ。つまり、履き物が身を預けることとかかわっており、ある領域（縄張り）内からことわりなしには出ていかない状態であることの意味する。ある領域（縄張り）とは、やはり「しきり」のある領域であるから、履き物は「しきり」とかかわっていることになる。

（注）下駄の歯の高いもの。

（出典 柏木博『「しきり」の文化論』講談社、二〇〇四年、一六八―一七三頁より。以上の文章に記述の形式について最小限の手を加えた。）